

2023年12月31日(日)

老球の細道767号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

1年の半分を歩行に苦勞した2023年が終わろうとしている。3月から9月にかけて、手術を回避するために歩き回った町内周回コースを今でも歩き続けている。痛みがなくなった幸せ気分を満喫し、二度とあのような痛みを経験しないためにも。

1月に目標を立てた山岡莊八著『徳川家康』(講談社)18巻をとうとう読破した。40数年前に読み始めたが3巻目で挫折した。NHK大河ドラマ「どうする家康」放映をきっかけにリベンジ。1年を要したが目標は達成した。たゆまざる歩み恐ろしカタツムリ。

1・読書から

◆「人生は眼をつむるギリギリまで闘いどござるぞ。その気力の維持の叶わぬ者は生きてあっても敗残者。眼の黒い間はジーっと闘志を燃やしてござれ」(『徳川家康 17』山岡莊八著：講談社)：死ぬまで抱いた目標に向かって闘志を持ち続けることができるかどうか。運命からどんなに良い顔を見せられても、最後の日が過ぎないうちは幸せだとは言えない。

◆「その分野における専門家とは、ありとあらゆる失敗を重ねてきた人間だ(ニールス・ボーア)」(『Sport Japan』日本スポーツ協会)：デンマークのノーベル物理学者の言葉。ただし、準備のない失敗は絶対にしてはいけない。なんら成長にはつながらないという。「つまづいたっていい にんげんだもの」詩人相田みつお氏は「オレは絶対つまづかない唯一の方法を知っているよ、何もしなけりゃいいんだ」。

2・新聞等から

◆「哲学者のように考え、美術家のように見、そして詩人のように感じ且つ書く」(朝日：天声人語)：「ファーブル昆虫記」を獄中で夢中になって読んだ大杉栄がファーブルについての評価で最も好きな文章だという。願わくば「オーケストラ指揮者のようにコーチする」。

◆「健康でいたい。そのために何をすればいいか、という課題はすべてストレスになります。健康を害しています」(朝日：折々のことば：横尾忠則)：老いる身体は年寄りの必然。爺様の健康は気力の充実。稀代の美術家は、健康のために目標など掲げず、シンプルに「快食快眠快便」、そして絵を描くこと。私は「メシ上手い。昼は元気。夜眠い」、そしてバスケット。

◆「最後は気持ちが足りなかった。“誰かがやってくれるだろう”という緩み、甘えが1点差にでてしまった」(朝日：ウインターカップ：桜花学園)：岐阜女子高校に20点差のリードを4クォーターで逆転される。全国優勝常連のチームでも気持ちの問題が・・・。

◆「最後の最後で受け身になってしまって、気持ちが足りなかったし、まだまだ日頃の積み重ねが足りなかったなど。たった1点差かもしれないけれど、その1点はものすごく大きな差だったと思います」(『月刊バスケットボール 2024 2月号』桜花学園)：日清トップリーグ戦で京都精華に負け。この後ウインターカップでも同じことが。1点差を克服する重みを痛感する。日頃から1点、1本のシュート、1回のトライ、1秒に愛を込めて。